

日本国際ボランティアセンター／トライアル・アンド・エラー(試行錯誤)

Trial&Error

No. 229



「子どもイラスト平和隊」がピース・ウォーク!

「生まれて初めてのボーリング」イラク緊急報告

なぜ朝鮮民主主義人民共和国に? <そこが聞きたい>

かつては命がけだった<ひとりごと>

ビデオ『あぶない野菜』<みるよむきく>

JVCのプロジェクト一覧

=非戦ネット=イラク攻撃反対署名 提出! <国内ひろば>

●特集

《牛銀行》

《豚銀行》

《コメ銀行》

etc.

くらしと営農のセーフティネット

JVC

Japan International Volunteer Center

4-5月号

2003
April

●特集 《牛銀行》 《豚銀行》 《コメ銀行》 e t c . くらしと営農のセーフティーネット

JVCが活動する地域では、社会保障制度や災害に対する公的な備えなどは、ほとんどない。かつて人々の安心を支えていた村人どうしの助け合いや、豊かな森や土・水がもたらした自給的なくらしも、今は昔の物語となった。家族から病人が出たり、災害に見舞われたり、大切な家畜が死んだりしたら、たちまち生活がひっくり返る。

この村のくらしに、もう一度安心を取り戻そうと、JVCは農村開発の一環として「くらしと営農のセーフティーネット」づくりを提案し、その仕組みづくりを続けてきた。村人による牛銀行、豚銀行、コメ銀行……。カンボジア、ベトナム、ラオスの村での活動を紹介する。（編集部）

カンボジア

「助け合い」あれば「憂い」なし

◆コメ銀行・牛銀行の仕組み

◎コメ銀行

農村の人々がもつとも心配していることはコメの不足。約四割の家庭で収穫の四カ月ほど前にコメが底をつく。こんなときでも、高利貸しなど外部の業者に頼らないですむようにJVCは「コメ銀行」の活動を続けている。

村人が共同でコメ銀行を設立し、まず村人が収穫時に備蓄するコメを拠出、JVCはそれにプラスしてコメを提供する。コメ銀行の参加メンバーは、家にコメがなくなつたとき、低利でコメを借りることができるという仕組みだ。設立、運営は次のように進められる。

- ① 設立希望の村で村人全員による集會を持ち、参加家庭を確定する。
- ② 参加する各家庭から元米として供出できる量と、返済時の利子を確定。
- ③ 米倉の建設場所を決め、参加者からの寄付とJVCの支援により米倉を建設する。



余部徹（JVCカンボジア事務所）

あまべとおる

自然農業に精通。草木を見る目は鋭い。ただの雑草に見える草も、実は大事な緑肥（畑にすき込み肥料となる草）だったりする。

- ④ 村人が供出したコメの四倍をJVCが足し、元米として米倉に入れる。
- ⑤ 多くの家庭で備蓄米が底をつく八月頃、米倉を開き、希望者に貸す。
- ⑥ 収穫時、利子米を加えて返済。米倉に戻して封印する。

たとえば、メンバーが五十家庭のコメ銀行を設立するとして、一家庭から二十きずつ計一ト集まったとしたら、JVCは、この四倍の四トを貸して、このコメ銀行は五トの元米から始めることとなる。貸し出しは五トを五十家庭で分けると考えると、一家庭あたり百き借りられる計算となる。返済はこの百きに二〇%の利子をつけて百二十き返し、五十家庭すべてが返せた

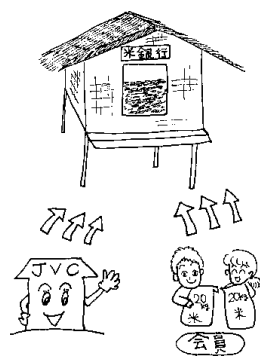
◎牛銀行

貧窮家庭に雌牛を貸し出す。飼っている間に子牛が産まれたら、その子牛のうち二頭をJVCに返却。三頭目からの子牛と、母牛はその家庭のものとなる。今後は徐々に村人がこの運営を担えるように仕組みを考えていく。

◎女性相互扶助グループ

小さな商売などをやりたい村の女性に対して、最初の回転資金を融通し合う助け合いグループ活動。参加する女性は、毎週一定額を貯蓄し、その実績により資金を借りることができる。

- ① 十人前後でグループをつくり、三カ月間毎週定額を貯蓄する。
- ② 落伍者もなく、目標を達成した時点でJVCが無利子で貯蓄の三倍の元金を貸す。第一回目は全員同額を借りる。返済期日はグループによって、職種によって話し合いで決める。
- ③ 毎月集會を持ち、利子を返済。毎月一定額小額の貯蓄も続ける。



▲米倉に元米を集める
(イラスト/寺西 悦子)

▼女性相互扶助グループ。毎月集まり、利子を払い貯蓄する



◆コメ銀行のもつひとつの役割

コメ銀行は、JVCのカンボジアでの農村開発で、もともと参加している人数が多い。この活動はコメ不足のときでもコメを低利で借りられることが目的だが、単にそれだけではない。

④ 期日には全員返済、次から借りたい人が借りる。
⑤ 六カ月から十カ月を「サイクル」とし、サイクルごとに反省会を行なう。
女性の小さな事業は、ヤシ砂糖生産、雑貨屋、鶏の丸揚げ売り、養豚、家具づくり、楽器づくり、お菓子づくり、野菜づくり、などさまざま。毎月の集会は悩みを相談したり共に働いたりするいい機会になっている。
この活動により、村の女性が自分の判断で使える資金をもてるようになり、女性の地位向上にも役立っている。

その昔、人々はコメが足りなくなると、お寺から借りていたという。利子が何%と決まっていたわけではないが、みんな必ず自分が借りた分より多く返して徳を積んでいた。

七〇年代以降の不幸な歴史のなかで、村落社会にあった富の再分配や相互扶助を機能させる知恵は、当時の指導者によってことごとく崩壊させられてしまった。特にポル・ポト時代は家族ですら密告し合うことを余儀なくされ、農村の人々の間に深刻な相互不信を残した。またその後の急速な市場経済化は拝金主義を生み、「信じられるのは力ネだけ」という意識が人々の間に広がった。

それゆえ、コメ銀行の背後にある目的は、水田を隣り合わせ、田植えを共同作業する者どうしが、相互不信や思想信条の違いを乗り越えて、物と心の両面で助け合い安心してくらせる村にするための、ひとつの試みなのである。

しかし多くの人間が関わる分、問題も多い。参加者がどれほどの仕組み、目的を理解しているか、その帰属意識や透明性の確保が運営の力ぎをにぎっている。運営委員の力量が問われる。しかも扱うのはコメ現物なのでお金と違って乾燥して重さが軽くなったり、カビが生えて食べられなくなったり、ねずみに食べられたりとややかしい。

それなら、お金でやり取りをしたほうがいいと思う方もいるかもしれないが、現物を確保しておくこともコメ銀行の機能として重要だ。コメの値段は市場価格によって大きく左右されるため、現物のコメを貸し借りすることは、安定性につながる。

ただこのコメ銀行は、一家庭あたりが借りられる量は粳で百^ポから二百^ポという程度だから、五人家族で一カ月ないし二カ月分のコメにしかない。そのため、コメ銀行と平行してコメの増産や家庭菜園などによる自給の向上と支出の削減、もしくはコメ以外の作物をつくることなどを同時にすすめていく必要がある。

☆ジューン・ナットさんの話

ルムリッチ村に住むジューン・ナットさん（四十八歳）は十二年前、夫を亡くしている。樹液を採るために登っていたオウギヤシの木から落ちたのだ。それから十二歳から十八歳までの息子二人と娘二人を育ててきた。

彼女はJVCの支援する相互扶助活動（牛銀行、コメ銀行、女性相互扶助グループ）のすべてに参加している。その中で、もつとも助けになっているのが牛銀行だという。四年かけてJVCに牛二頭（彼女の場合、特別に子牛一頭、母牛一頭）を返し、いまは雄牛二頭を飼っている。牛銀行は自分の責任ですべて決められるのがいいという。将来的には、今いる雄牛一頭を雌牛と換えて、子牛を増やしたいのだそう。

JVCに返した牛は別の村に行ったほうがいいか同じ村にいたほうがいいか聞くと、彼女は他の村に行つてほしいそうだ。なぜなら大事に育てた母牛なので同じ村にいたとよく見かけて恋しくなってしまうから。「でも次の飼い主に渡した牛でも、幸せにくらししてほしいのでときどき見に行っているの」という。

牛のいない頃は、一日誰かに頼んで田を耕してもらうと、二日田植えの手伝いに出なければならなくて大変だった。牛が増えたら今度は自分が牛を貸し出したいそうだ。また牛フンが得られるのも大きい。最近では、あまりコメ銀行や女性相互扶助グループから借りなくて済むようになった、とも。

JVCのやり方は話し合いが多いが、このことについてたずねると「こういった活動は運営が難しいのだから、簡単にしたら村から



お金が出ていってしまふ。話し合いが多いのは嫌ではない」と、頼もしい答えが返ってきた。
（あまべとおる）

▼牛銀行の牛と村人たち。ベトナムの牛はきれいな茶色



家畜銀行・種子銀行

苦しくなった山の暮らしを支える

鹿住正人（JVCベトナム事務所）



かすみ まさと
ベトナムに赴任して二年あまり。
育児との二足のわらじで頑張るパ
ー。

◆お金のない農家に「家畜銀行」

ベトナムには、五十四の民族が生活をしてい
る。その中でも北部山岳地域には、多くの少数
民族がくらししており、その多くが農業に従事し
ている。一九九九年から活動が続けているホア
ビン省タンラック郡ルンヴァン村は、ムオンと
呼ばれる少数民族が古くから水稲作を中心とし
た生活をしている。

ベトナム戦争後、国が安定すると同時に様々
な行政サービスも村に入ってきた。二〇〇〇年
に、小学校、診療所、〇二年には市場が新築さ
れた。さらに〇二年末には、念願の電線が村ま
でやってきた（しかし、未だ家には電気が届かず）。村
の生活が大きく変わり始めた。それと同時に貨
幣経済も急激に浸透するようになった。

◆飼育の研修、草の根獣医の養成も

家畜銀行の借り手となるにはいくつかの条件
がある。一番の条件は、牛・豚を持つていない、
また購入する資金力がないことである。さら
に、過去に飼育経験があり、現在も飼育技術を
持つていないこと。エサを用意できること。

牛・豚を持つていないことは、一目瞭然なの
で、審査は簡単だが、飼育技術の有無、エサが
用意できるかどうかは、明確な判断基準がな
い。どの家が借りるかは、集落会合で相談して
決められる。不公平がないよう、集落ごとに借
り手農家とその順番を決めている。そうするこ
とによって、この活動は集落の活動なのだと思
いなが認識してくれる。

飼育技術においては、飼育経験があり、飼育
技術を有することが前提であるが、自己申告制
であるため、技術のレベルを計る手段がない。
そのため、貸し出し前には、借り手農家と集落

リーダーを対象に飼育研修会を実施している。
また、牛銀行では、牛の飼料用作物の苗を国立
家畜研究所から安価で分けてもらい、栽培を奨
励している。さらに、側面的支援として家畜の
病気を防ぐ「草の根獣医」の養成も行ない畜産
環境の改善にも努めている。

◆そして、子牛・小豚は自分の家畜に

運営は「村づくり委員会」の集落メンバーが
担当している。担当者は、家畜を借りている農
家を巡回し、飼育指導を行なう。問題があれば
直ちに草の根獣医へ連絡し、診断・治療を受け
るようにしている。予防接種も定期的に行な
い、借り手農家だけで家畜を世話するのはな
く、集落の住民みんなで家畜を守る体制をつ
くるように心掛けていく。飼育状況などは、集落
会合、村づくり委員会の会合でも報告される。
そうすることで、借り手農家も「家畜を預かっ
ているのだ」という意識が持て、世話がおろそ
かにならないようにしている。

借り手農家は、妊娠中や授乳中の母牛・母豚
の世話と月々の利子を支払う義務を負う。しか
し、子牛・子豚返還後は、母牛・母豚は自分の
ものになる。加えて、飼育中はそのフン尿を肥
料としても利用できる。

◎牛銀行

牛は、農家にとって一番の財産である。昔の
日本でも牛は貴重な財産として、家の玄関で飼
う農家も珍しくなかった。牛は、機械化が進ん
でいない農村では、耕運機とし
て、運搬手段として大きな働き
手となってくれる。また、繁殖
するので、その販売益は大き
い。非常時にも、すぐに現金に
換えることもできるので、貯蓄
の対象にもなっている。

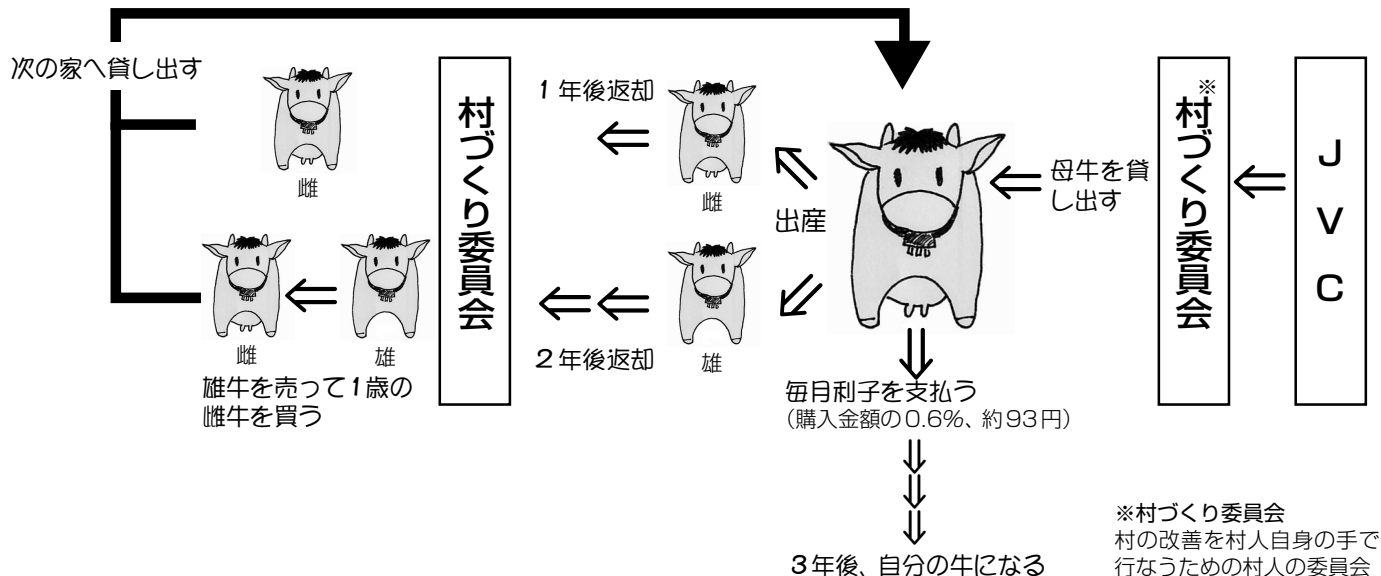
◎豚銀行

ベトナム北部山岳地域の農村部では、主な現
金収入源として、豚肥育が盛んに行なわれてい



イラスト/かじの 倫子

＜牛銀行の仕組み：ベトナム＞ ※ JVC の家畜銀行やコメ銀行の仕組みは、国や地域によって異なります



◆がんばった農家が損をする？

これまで、母牛・母豚の死亡が後をたたない。住民は、今年の冬は寒かった、今年の夏は雨が長く病気が多かった、とばかり理由をいう。しかし、さらに話をきいていくと、エサが不十分で弱っていたところに寒波が襲った。小屋の清掃が不十分で病気が広がったなど、原因がそこかしこにある。また、利子の支払いがとどこおるケースも多い。

作物の種を買う資金を貸し出す「種子銀行」では、貸し出し金額の半分近くが未回収となつて

ラオス コメ銀行 安心してくらせるようになった

小川道夫 (JVCラオス・ビエンチャン事務所)

◆もう、コメ貸し業者には借りない

ラオスでのコメ銀行の仕組みはこうだ。ある村がコメ銀行を始めた時は、まず、村の有志がコメを出し合って元米が蓄えられる。村によつては全家庭がコメ銀行に参加することもある。それぞれの家庭が出すコメの量は、村ごとに決められていて、少ないところで二十ポ、多いところで五十ポくらいだ。さらに、村人から集められたコメに加えて、JVCがまとめた量のコメ、だいたい二ポを、期限を区切って村のコメ銀行に貸し出す。期限は二年から三年が一般的だ。コメを出した家庭を会員と呼び、その中から責任者、副責任者、会計係、米倉係などが決められてコメ銀行運営委員会が組織さ



おがわ みちお
琉球大学農学部卒、ミクロネシアで青年海外協力隊として活動。現在、ラオスで農村開発を担当。

れ、コメ銀行の運営がスタートする。

六月、田植えの頃になると、コメが足りなくなる家庭が出てくる。それまで蓄えてきたコメが底をついてしまう。その理由の一つは、種としてたくさんコメを田んぼに撒くから。もう一つの理由は、田んぼの仕事で忙しく、森や川に木の実や野草、小動物や魚をとりに行く時間がなくなり、その分、家庭内でのコメの消費量が増えるためである。

コメ銀行ができる前は、この時期に、コメ貸し業者からコメを借りていた。コメ貸し業者の

ている。天候で作物の生育具合が悪く、販売できなかったから集金できない、という。では、次の活動はどうするのか？元金が全額戻らなくては、昨年と同じだけ貸し出すことはできない。どうやら、JVCがその穴埋めをしてくれるだろうから問題ない、と考えているようだ。

また、同じ民族の小さな村では、金の貸し借りは簡単にできるが、催促は難しい雰囲気がある。種子銀行を運営する方も借りる方も元手は村人のものではないから、どんな状況になろうとも経済的損失は被らない。そのため、どこか真剣さが足りない。

JVCだけでなく、近年、行政からも貧困家庭への支援は増えてきている。がんばって働き、家畜を手放さなかった村人から見れば、その支援はうらやましい光景だ。それが活動の問題点を曖昧にさせて、解決を難しくしている。

▼収穫したコメがコメ銀行に集まってきた



利率は、一〇〇%と高利だが、村の人たちは、高い利子を払ってもこのコメを借りていたそうだが、でも、コメ銀行ができてからは、村の人たちが運営するコメ銀行から、安い利子で安心してコメを借りられるようになった。

◆「利子五〇%は安いもの」

ボンソン村では、九九年にコメ銀行が始まった。五十六家庭から全部で九百^キのコメが集められ、JVCからは回転資金の二千^キのコメが貸し出された。ボンソン村の利率は、会員が三〇%、会員でない人は四〇%。〇一年には村の全家庭六十五家庭がコメ銀行に参加して、元米は六^キを越えた。将来はこのコメの一部を売って、村の発展のための活動に使うというのが彼らの目標である。

同じ年に始まったボンサワート村では、七家

族、三百五十^キの元米でスタート。年々会員家庭が増え、三年後にはJVCから二^キのコメが支援され、合計三^キ四百六十五^キのコメ銀行になった。

JVCから支援された二^キのコメは、三年間をかけてJVCに返却される。一年目は一〇%の二^キ、二年目は四〇%の八^キ、三年目は五〇%の一^キ、といった具合だ。

この村では利率は五〇%である。利率をはじめコメ銀行の規約は、村人によって定められる。JVCが「五〇%の利子は高くないですか?」と聞いたところ、「そんなことはあるものか、以前は一〇〇%の利子を払っていたんだから、五〇%は安いものさ」という返事が返ってきた。

◆問題は、コメを返せない人がいること

コメ銀行のいいところは、低い利率でコメを借りることができること。田んぼの作業が忙しい時にコメがなくなっても、コメ銀行から借りられるので、よその村へ賃労働に出なくてもすむ。自分の田んぼで農作業が続けられるので、栽培面積が増える。コメ銀行の元米が増えれば、そのコメを売って村の発展のために使うことができる、などである。

「難しいことは、なに?」と聞くと、コメを返さない人がいること、という。コメを返さない人には、家族の誰かが病気になるったり、収穫が少なかったりと理由があるので、その改善は実際のところ難しい。

もうひとつは会計について。ほとんどの村で帳簿つけに問題があつて、借りた人の名前やそのコメの量が、ノートのあるところにばらばらに書きこまれていた。改善するために、コメ銀行の代表が集まってもらい、会計処理の訓練を受けて、十年近くコメ銀行運営を続けている村人から帳簿のつけ方を説明してもらった。それから、どこの村も、誰が見てもわかりやすく帳簿をつけるようになっていく。

☆おかげで「カオニャオ」が食べられる

二月、ビエンチャン市を北へ約九十^キのボンソン村を訪ね、コメ銀行運営委員代表のシーサケットさんに、話を聞いてみました。四十八歳の彼は、奥さんと子ども五人の七人家族。今日も会計帳簿の確認に来たのかと、さっそく会計帳簿を持ってこようとして「はい、今日はちよつとコメ銀行活動の話が聞きたいだけです」というと、こんなふうに語り始めました。

* * *

ラオス人はカオニャオ（もち米）がなきゃやっていけない。山や畑で力仕事をするのに、カオニャオが欠かせない。カオチャオ（うるち米）では腹持ちが悪く、すぐお腹が減るし、体力ももたない。昔はおコメが少なく、みんなまずカオニャオを食べて、それがなくなったら、次はカオチャオも食べたけれど、それでも充分ではなかった。そこでコメを借りて遠くの村まで行って、業者からコメを借りていたんだ。利子は一〇〇%もした。五十^キ借りたら百^キ返さなきゃならなかった。おコメを借りに行くのに、時間もかかるし、お金もかかる。

でもコメ銀行を始めてから、村の中で、安い利子で借りられるようになった。時間にゆとりができ、畑にまめに行ったり、村の中の仕事に専念できるようになった。コメの蓄えも年々増えてきている。今では、隣の村のおコメが足りない家庭にも貸し出している。私たちはコメ銀行をこれからもずっと続けていきたい。コメ銀行のコメはもちろん全部カオニャオだよ。今では、カオニャオが十分に食べられるので、うれしいよ。

* * *

シーサケットさんは、本当にうれしそうに話してくれました。



（JVCビエンチャン事務所
寺西悦子）

安心をみんなに分かち合おうために

塚本和泉／ラオス事業 担当

◆「わが身を守る地域活動」が不可欠に

農業↓工業↓サービス・金融と「富」を生みだす主要な生産活動が変化し、弱肉強食がまかり通る中、JVCの活動地でも「勤労意欲」や「他人を思いやる気持ち」がわきに追いやられる傾向がある。政府や自治体の対応が後手に回る中で、住民自身の「わが身を守る地域づくりの活動」は欠かせなくなってきた。

日本でも、社会保険制度の破綻や介護保険の導入に見られるように、家族や近所どうしで助け合う仕組みが崩れ、セーフティーネットの再設計をせざるをえない状況を迎えている。「成長」を追い求めてきた社会の仕組みと価値観の全面的な見直しでもある。

行政機能が十分に発達していない「南」の国では、地域における相互の助け合いが昔から「むら」の営みの中で大きな位置をしめてきた。葬式を出せない貧しい家には、近所の人たちがみんな葬式を出して死者を弔った。働き手の乏しい家の田植えや稲刈りには、みんなて手を貸した。

そんな生活も少しずつ変化している。「労働

や生産物を現金で計算する生活への移行」「生活の糧を得ていた森林の減少」「出稼ぎなど、生活の変化」などである。

◆「コメ銀行・家畜銀行」の意味・課題

今までJVCは農村開発の活動の中で、コメ銀行、家畜銀行などを実施してきた。各国の報告でも見て取れるように、この活動は次のような意義がある。

- ① コメを十分に収穫できない家庭が、高利貸しに頼らずに低利子でコメを手に入れる。
- ② 出稼ぎに出なくていい分、農繁期に農業に集中できる。
- ③ 村全体のことを考える活動が拡大する。村を担う人材が育つ。
- ④ 家畜のいない家庭も、持つことができるようになる。

一方、問題点としては、

- ① 借りたコメや家畜を返却できない家庭がある。
- ② 村の中に、援助団体の資金だから返さなくてもいいのでは、という思いが生まれる。
- ③ コメ銀行の運営能力が不足して、管理できなくなる。
- ④ 家畜飼育技術が不足して死なせてしまう。

問題の解決のために、次のような配慮がなされてきた。

- ① 参加家庭からコメを供出してもらい、自分たちの活動であることを実感できるようにする。
- ② 帳簿のつけ方など、管理能力を高めるための研修を実施する。
- ③ 経験のある村の教訓（特に失敗とその対策）を学ぶ場を設定する。



つかもと いずみ
学生運動から、人権・平和を求めてきた団塊の世代。ラオス事務所代表をへて、東京事務所ラオス事業を担当。

- ④ 家畜飼育技術の研修を行ない、村人の中に飼育技術や病気に対応できる人材の育成に努める。
- ⑤ JVCが最初に供出する元米を他の村に移す時のフォローアップを行なう。
- ⑥ やる気がある村を選ぶ。

◆村のセーフティーネットをつくるには

コメ銀行や家畜銀行が着実に運営されれば、村のみんなが安心してくらせるための下支えとなる。自分たちでつくる村のセーフティーネットである。しかし、それだけでは村を取り巻く変化に対応していくのは難しい。コメ銀行の活動で蓄積した力を、村の実状に応じて、さらなる次の活動へと展開していくことが欠かせない。ラオスのある村では、利子を蓄え、コメ銀行の元米をJVCへ返済した上で、村に電気を引く代金を捻出したり、貧困家庭に供与したり、寺に寄進したりと柔軟に活動力をつけていった。

コメ銀行の活動は、自分たちの村の問題とその原因を分析し、村の中にある資源や人材を有効に使う活動計画を立て、実行していく中で、自分たちの手によるセーフティーネットへと結実していく。

外から持ち込まれるうまい話に浮き足立たず、はじめに働く人が苦しまなくてすむよう、本来地域に備わっていたルールを、活動としてしっかりと確立していくことを目指している。セーフティーネットとは、問題があった時の受け皿にとどまらない。社会のあり方そのものである。JVCはこれからも地域に根付く独自の知恵と、人々の活動力の生きた発展の形を支え、広めていきたい。



《イラク緊急報告》

生まれて初めてのボーリング

佐藤真紀／中東担当

この原稿が読者のお手元に届く頃、イラクでは何が起きているのか、予断を許さない。もしかしたらアメリカの爆撃の下にいるかもしれない「イラクの子どもたちの今」をお送りする。(編集部)

●劣化ウラン弾、白血病で

苦しむ子どもたち

白血病で苦しんでいる子どもたちがいる。湾岸戦争時に使用された劣化ウラン弾が原因とされている。バグダッドにあるマンスール教育病院には、白血病専用病棟がある。

前回訪問したときに医学書が欲しいといわれたので、白血病や小児がんの本を日本から購入して持ってきた。イラクでは経済制裁のため



▲白血病に苦しむラナちゃん(12歳)。

書籍が手に入らない。二〇〇二年からは兵器に転用される可能性があるものの以外は輸入できるようにしたはずだが、専門書はチェックが厳しい。医療の知識は生物兵器開発につながるというわけか。担当の医師は私の持ってきた医学書に目の色が変わる。医師たちは一生懸命古本をあさり、何とか最新の医療技術を習得しようとして必死だ。しかしほとんどが十年以上前のものなのである。

病室を案内してもらおう。子どもたちはぐったりとしていて、絵を描いてくれる子どもを捜した。十二歳のラナちゃんだけが「いいよ」といつてくれた。彼女は北部の町、モスルからきた。二十日前に白血病であることが判明したという。左目が真っ赤に充血している。医師の話では、白血病の末期になると眼球が飛び出すこともあるそうだ。

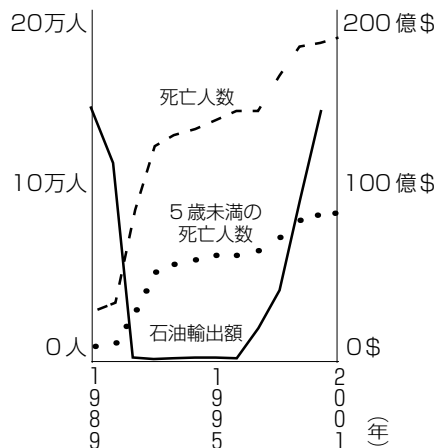
経済制裁のため、化学療法薬が化学兵器に転用される可能性を調べられ、一部の薬は入ってこないという。ラナちゃんが強く握り締めた鉛筆の先から、線が出てくる。ゆっくりと力強く、彼女は私が見せた日本の子どもが描いた自画像をそっくり写していく。「どう？ うまいでしょう」と彼女は得意げだ。そして、隣に自画像を描いた。「日本の友だちがいたらうれしい」。難病で苦しんでいる子に聞くのはつらかったが、「将来何になりたい？」と聞くと「先生」と答えてくれた。

医師は「今のイラクでは白血病の子どもの治療は難しい。一年が勝負でしょう」といった。長引く経済制裁で多くの子どもが死んでいった(ラフ参照)。死因は、呼吸器の感染症や下痢、栄養失調である。抗生物質や食料があれば助かる病気だ。経済制裁の非人道性を改善しようと始



さとう まさき

イラクへ行ってげっそりやせた。自画像イラストをイラクへ贈るために各地から寄せられる子どもたちの無邪気なイラストに、元気を取り戻している昨今。



▲石油の輸出額と経済制裁で亡くなった人数
輸出額が伸びても死者の数はもはや減らない。一部は豊かになっても貧しい人は死んでいく(赤新月社などのデータから作成)

●それでも、赤ちゃんは産まれてくる

また「※食料のための石油」やNGOによる人道支援は、助かるかどうかかわからない難病の子どもに高価な薬を与えるよりも一般的な抗生剤や食料供給が優先されるために、白血病の子どもたちは見捨てられてしまうことも多い。

JVCは、赤新月社(イスラム教国で災害救護・公衆衛生などの活動を行なう団体)に協力し母子保健病院の補修を開始した。医療機器のメンテナンスがほとんど行なわれていないので、壊れたままなのだ。湾岸戦争以前は日本の商社が動いていたので多くは日本製だが、制裁が始まってからは日本製の部品が入らない。調べてみるとその部品はすでに製造中止だったりする。手術室に入ると、室内灯のハロゲンランプが切れている。これも日本製なので、最近ヨルダン経由で入ってくるドイツ製のものは規格が合わない。設備が不足し、結局イラク全体で手術の数が半分には減ってしまった。これも死者が増えている原因の一つだ。

それでもこの病院に行くのは楽しい。毎日三

*食料のための石油(=Oil for Food): 食料を買うために限定して、石油を輸出できるとする国連によるプログラム



●お絵かきより靴磨きさ

十人くらいの赤ちゃんが産まれている。産まれたばかりの赤ちゃんはガーゼで頭も体もくるまれる。そうすると泣かないのだそうだ。赤ちゃんは元気よく産まれてくる。まるで、戦争をしようとしている連中をあざ笑うかのように。しかし、残念なことに十人に一人は一年以内に死んでしまうという。

アメリカの団体「辺境からの声 (Voices from Wilderness)」がボーリング大会を行なうという。企画したスミスさんは「アメリカとイラクがボーリングで勝負だ」と張り切る。会場で募金を募り、子どもたちのためのプロジェクトをやっているフランスの団体「世界の子どもたち (Enfants du Monde)」に寄付する。アメリカチームは途中にいろいろな人がチャリティーでボールを投げるので、なかなか終わらない。そんな中、生まれて初めてボールを投げた少年がいた。ハッサン君(八歳)だ。最初はなかなかピンに当たらなかったが、だんだんコツを覚えてきたらしく、おおはしゃぎだった。彼の手がやけに真っ黒だったのが気になった。ボーリングのボールは黒いけど、触ってみたら黒くならなかった。あくる日なぞが解けた。ホテルの前で彼は、靴磨きをしていたのだ。



▲ボーリングをする
(絵：ハッサン君)

う。ジャーナリストの友人は、「前に来た時はスニーカーだったけど、今回は靴を磨いてもらおうと思って革靴を履いてきたんですよ」といつていた。ハッサン君は稼ぎをあげようと一生懸命だ。

「靴磨きはいいかからお絵かきでしよう」。私はかばんからスケッチブックを取り出してハッサン君に手渡した。「何を描くの？ 絵なんて描けないよ」「じゃあ、ボーリングの絵を描いてみてよ」。ハッサン君は一生懸命描いてくれる。でも外国人が通りかかると、絵なんかそっちのけで仕事へ戻る。

●戦争する理由?!

いよいよバグダッドにも戦争の影が忍び寄ってきた。外国人の多くは退避を始めた。私たちのパートナーであるフランスのNGO「世界の子どもたち」のスタッフもアンマンに避難することになった。戦争に反対しているフランスが退避し始めたことは、戦争はやはり避けられないのかとイラク人に緊張感を与えている。私たちJVCは、このNGOと協力して貧困地区の五歳未満の子どもたちの栄養改善プロジェクトを行なう話を詰めていたが、結局時間切れとなった。戦争が回避できれば、JVCはこのプロジェクトをスタートさせる。もし戦争が始まってしまったら、現場に駆けつけて、貧困地区での救援活動を行なうことになる。

九一年の湾岸戦争で死亡したイラク人一般市民は十五万人ともいわれている。その後の十二年間の経済制裁で死亡した人は百七十万を越える(赤新月社)。今戦争が始まれば、いったい何人の一般市民が殺されるのだろうか。病院で会った子どもたち。産まれたばかりの赤ちゃん。学校に通うこともできない貧しいストリートの子どもたち。真っ先にこういった子どもたちが犠牲になる。私たちはこの非人道的な不条理な戦争に反対する。イラクの大量破壊兵器は、査察で廃棄すべきだ。アメリカは戦争の費用を九百五十億ドルと見積もった。税金を使い、それによって儲ける人がいる。武器商人と、石油業界だ。そして、日本の業界も儲けようとしている。

「子どもイラスト平和隊」がワールド・ピース・ナウに参加!

三月八日(土)、東京の日比谷公園でイラク攻撃に反対する集会が開かれ、予想をはるかに上回る四万人(主催者発表)が集まりました。JVCからは五十名近くのボランティアが「子どもイラスト平和隊」として参加し、日本の子どもたちがイラクの人々へ贈ろうと描いた自画像と平和のメッセージを、胸や背中に提げて路上展示会をしました。

横浜から駆けつけてくださった館山さんご一家の姉妹まいちゃん(十歳)とちえちゃん(八歳)は「パパもママも戦争は絶対ダメっていつて。たくさんの人が死んじゃうから...」とみずから自画像のパネルを持って道行く人に非戦を訴えました。



集会後の行進は先頭が午後三時半に、最後尾はなんと六時半に出発でした。辛抱強く公園内で待っていたみなさん、本当にお疲れさまでした。(会員・開発教育担当/中山いくこ)

拉致問題がクローズアップされて以来、「なぜ北朝鮮を支援するのか」と問いかけることが多くなりました。また、支援がイメージしにくいとも。今回は朝鮮民主主義人民共和国への支援についてです。

本誌『T&E』の二月号(2021年)に北朝鮮への太陽光発電支援が載っていました。北朝鮮に批判的な空気があ

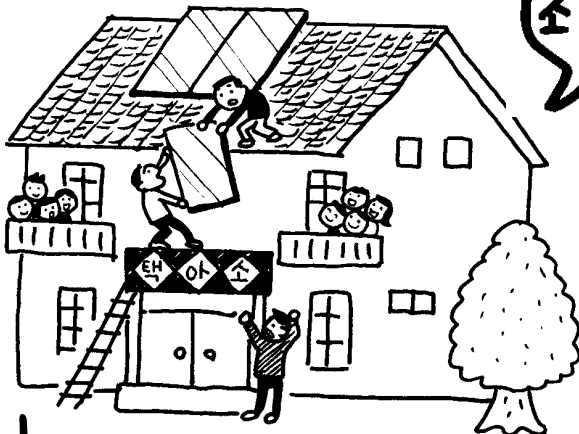
る中で、JVCはどうして北朝鮮を支援するのですか？

一九九六年の洪水被害に対して緊急の食糧支援を行なって以来、JVCは「KOREAこどもキャンペーン」の構成団体として、他のNGOと共に支援を続けてきました。これには、大きくふたつの理由があります。

まず、日本からもっとも近い地域で苦しんでいる人々を人道的な見地から支援することです。「人道的な支援」とは、支援する先の政治体制などに左右されないものです。今回の太陽光発電支援も、日朝関係がどのような状況にあると、現地に住む人々の生活を案じるみなさんの支援によって実現しました。

そして、平和な未来をつくるための努力を続けていくこと。現在は国交もなく、お互いをつなぐパイプはほとんどありません。けれども、数年後またその先には、当然この「つながり」を、もっと太く多様にするのが求められるようになるでしょう。その土台づくりを、いまこの時点でできることから始めるのが、大切なことだと考えています。

▼協同農場の託児所へ太陽光パネルを取り付ける



わ~うれしい☆

先日のイベントも「Japan-Korea 平和ワークショップ」というタイトルでしたが、なぜ「コリア」と呼ぶのですか？

今は南北に分かれているけれど、朝鮮半島を一つの「コリア」と考えたいからです。JVCの朝鮮半島への関わりは、北朝鮮の人道支援から始まりましたが、これには日朝だけでなく、在日コリアンの方や韓国との協力関係が欠かせません。特に、韓国NGOは近年、積極的な活動を展開しており、その姿勢から学ぶこともたくさんあります。そのすべての人々とのつながりを含めたいという思いから、「コリア」を使っています。

なぜ朝鮮民主主義人民共和国に？

現在も北朝鮮に入れるのですか？どうやって入るのですか？

北朝鮮への観光ツアーなどもあります。観光以外で日本人が行く場合には、受け入れてくれる北朝鮮の政府機関や団体が必要になります。訪問を希望する際には、この受け入れ団体に、訪問目的や訪問希望地などを申し入れて、調整した上で招へいしてもらう形をとります。

日本から北朝鮮へは、直行のチャーター便や船便を利用して行けますが、基本的には一度、北京やウラジオストクを経由しなくてはなりません。北朝鮮と国交のある第三国で入国ビザを取得するためです。

北朝鮮では、自由に行動できるのですか？人々の生活はどのくらい見えるのですか？

たしかに北朝鮮で、自由に電車やタクシーに乗ることはできません。あらかじめ相談してたてた計画に基づいて行動します。けれども、訪問を重ねることで人々のようすや変化が見えてくることもあります。たとえば、太陽光パネルを設置した協同農場は、何度も訪問しているところ。今回は、村の中を散歩したり、台所を借りてせんざいをつくったりもしました。たこ揚げをしている子どもたちの楽しそうなおうすは、日本では、なかなか報道されないものだと思っています。

* 答え人：コリア担当・寺西 澄子



カンボジア事務所 ピン・パン

ドライバーとして働き始めて、もう30年以上になる。最初は、運輸省のドライバーとして、プノンペン市のごみ収集をしていた。75年から3年間はポル・ポト時代で、農村で強制労働。その後また運輸省のドライバーに戻り、JVCで働く91年までは、食料や物品を運ぶために、いろんな地方を行ったり来たり。

そのころはまだポル・ポト兵がカンボジア中にいたからね。地方に行くとき地雷も多く、とても危険だったよ。コンポントム県でコメを運んでいたとき、ポル・ポト兵に車を射撃されたこともあったしね。車から飛び降りて、どうにか助かったけど。車は炎上しちゃったよ。その後、ポル・ポト兵と助

けてくれたベトナム兵の撃ち合いになっていた。そういえば、夜眠っている間に、コメを積んだトラック7台が襲われたこともあったなあ。これも急いで逃げたから助かった。

コンボンチャム県でマメを運んだときは、地雷の事故にあった。自分が朝通った道を夕方戻ってきたら、ベトナム兵のトラックが地雷で吹っ飛んでいた。近所の人たちがいうには、自分たちが通った後から来たトラックが地雷を踏んだって。お前たちはラッキーだった、といわれたよ。

JVCのドライバーになってからは、カンボジアの状況も安定してきたし、カンダール県とプノンペンを行ったり来たりが主だから、ポル・ポト兵や地雷の心配はなくなった。その代わり、98年くらいまでは強盗が多かったなあ。ランドクルーザーなんかはよく狙われ

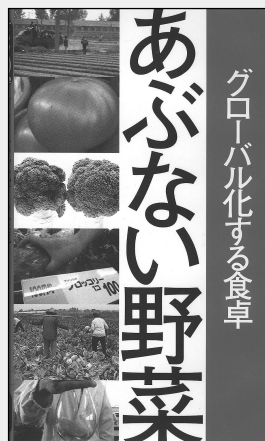


イラスト/かじの倫子

たからね。強盗にあわないように、気をつけたよ。行きと帰りの道を同じにすると、待ち伏せされることもあるから、帰りは違う道を通ったりしてね。

今では、そんな心配もしなくてよくなった。随分楽になったと思う。まあ、車を運転することは自分の仕事だから、何か起こることを恐れてはいないけどね。

(インタビュー／原田 恭子)



ビデオ「あぶない野菜」

制作 アジア太平洋資料センター
監修 大野 和興／西沢 江美子
構成 鈴木 敏明 定価 8000 円

アジア太平洋資料センター(PARC)
ビデオ制作班／津久井純

ている。
えられれば、と願っ
徒など若い世代に伝
を、とくに学生・生
ないか。この違和感
感から考えて見れば、ひどく不
思議で、違和感のあることでは
思議で、違和感のあることでは

「あぶない野菜」と聞いてみなさんは何を思い浮かべるだろうか。昨年盛んに報じられた野菜の残留農薬？ 中国野菜？ それとも遺伝子組み換え作物、水耕栽培作物…？ 近年野菜づくりに新しい技術、方法が使われ、私たち素人には何がどうなっているのかわからない状況だ。このビデオは、輸入野菜の残留農薬問題を手始めに、私たちアジア太平洋資料センター(PARC)ビデオ制作班が調べた結果である。生産の現場では何が行なわれているのか？ どのようにつくられているのか？ 野菜はどこから輸入されるのか？ どのくらいの時間、距離を越えて来るのか？ 誰が野菜を運んでいるのか？ 日本の港でどんな検査がなされるのか？ どこで売られているのか？ いつ、どこで私たちは輸入野菜を食べているのか？ ビデオはこのような問いに順次答えていく構成とし、現代の食をめぐる問題を広く提示できるように心がけた。制

みる よあ きく

と。こんなこと、私たちの生活実感から考えて見れば、ひどく不思議で、違和感のあることではないか。この違和感を、とくに学生・生徒など若い世代に伝えられれば、と願っている。
アジア太平洋資料センター(PARC)
ビデオ制作班／津久井純

作を終えて気になるのは、アグリビジネスの動向だ。野菜は土から生まれ、収穫後も一刻と成長し、また腐敗に向かっていく生き物である。ところが輸送方法を見ればわかるが、アグリビジネスにとって野菜はいくらでも操作が可能な商品であり、冷やし、薬漬けにして生命の機能を止めて扱う。これは「半殺し」野菜といってよいのではないか。それだけではない。つくり手でもなく、食べる人でもないアグリビジネスが着々と食の支配をはじめている。そもそも食べる人となる人が先にあり、それをつなぐ役割を担うのが流通業におけるアグリビジネスであるはずだ。ところが、生産者は流通業界の顔色を見てつくり、消費者は流通業界のイメージ戦略に乗って買わされている。安いというだけで生命の機能が止まったものを食べる。野菜をつくらされる、食べさせられること。

《開発協力》

タイ

Thailand

地場の市場づくり

ポン町で「むらとまちを結ぶ市場」がスタートして三カ月がたった。これまでの経験をもとに、市場の規約や朝市委員会の役割を明確にするための話し合いを重ねている。また、十二月にはプロジェクト地域の村人二人を率いて日本の地域グループを訪問、二月にはタイ北部で先駆的に取り組まれている村人による市場づくりを見学した。

(松尾)

北タイ調査

北タイ地域の近況を把握し、パートナーとなるNGOの活動内容を学んだ。ビルマ国境に近いフアン川流域の二つの村を中心に調査を行なっている。まずは村人との信頼関係を築き、同時に村の暮らしや村人の考える将来像について、調査を行なっている。調査期間を今年九月まで延長することになった。

(木村)

農村で学ぶインターンシップ

二月十五日に、東京事務所にてインターン修了生の懇親会を行なった。国内研修でお世話になった三里塚の方もお招きし、参加者十五名の会となった。農業をやるうとしている人、まだ自分のやりたいことがはっきり

せず、もう一度海外に出てみようとしている人、NGOで活動している人など、様々な立場から率直な思いを語り合った。インターンたちは、仲間と夢や悩みを打ち明けあうことで、お互いに勇気づけられたようだ。

(森本)

ノンゾク自然農園

一九九八年に立ち上げられたこのプロジェクトは、今年度から事実上JVCから独立して運営されてきたが、今年一月に評価を終え、三月をもってJVCのプロジェクトとしては正式に終了することとなった。農園は今後、現地の団体として活動を展開する。何もない荒地から五年間で自立できる農園ができたことは、農園スタッフの努力によるところが大きい。JVCとしても大きな成果といえよう。今後もJVCは当農園の中に事務所を置き、お互いにサポートしあう。(森本)

カンボジア

Cambodia

持続的農業と農村開発(SARD)

コメ銀行への返済はほぼ終了した。昨年の干ばつ被害の割には順調な返済状況である。二〇〇二年の活動全体の振り返りと〇三年の計画を立てた。スタッフの人数が限られているので、より実行可能な計画の策定に努めた。

また、地下水位が最も下がる

これからの時期に向けて、各村の水の状況を聞き、井戸の掘削計画をつくるのに役立てた。家庭菜園やきのこ栽培のトレーニングを行なった。(余部)

資料・情報センター(TRC) 書籍の管理や新聞の切り抜き作業を続けている。パンフレット作成後、当センターの認知度が高まったようで、利用登録する人も着実に増えている。農業削減ワークショップに参加し、TRCの出版物やパンフレットを配った。(余部)

技術学校

プノンペン校・工場は、同校の土地の使用を運輸省に求める企業により移転問題にさらされた。JVCが閣僚評議会長官に現在の場所の長期使用を求める請願書を出し、なんとか移転せずにすんだ。シアヌークビル校・工場は収入が二〇〇〇年度より悪化。運営委員会はシアヌークビル輸送局長が経営に全面的に関わる事を希望し、一月から局長が関わる事になった。(米倉)

調査研究・政策提言

住民主体の漁業共同体の模範例をトンレサップ湖周辺で探し、バクタンパンの模範例をコンポanchuan県の漁業局と地元NGOに紹介し、彼らの活動地域になるよう促す方針を決めた。土地調査の今後二年の調査の方向性と日程の詳細を決めた。

世界銀行によるカンボジア政府の森林伐採計画支援について、JVC東京事務所と共に財務省

定期協議での質問と提言を試みた。(米倉)

ラオス

Laos

自然農業と農村開発(ピエンチャン)

一月中旬に始まったポンソンの村の簡易水道工事は、二月四日に無事に作業工程が終了した。千五百メートル離れた沢から村までパイプで水を引くこの工事は、全六十四家族から毎日一人が工事に参加し、全過程が村人の手によって行なわれた。今では、村長らの管理で朝晩一回ずつ水道の元栓が開けられ、村人のもとに水が届いている。

(小川)

森林保全と自然農業(カムアン)

二月三日から七日までカムアンプロジェクト評価会議を二年ぶりに行なった。村人の森林資源に対する管理意識が芽生えていること、農業の研修内容は理解されても実践するには至っていないこと、ジェンダーについてのコンセプトの普及は一応終了という結果となった。どの分野も道半ばであるので内容を更新し、七月から次なる段階を開始する予定。(中村)

ベトナム

Vietnam

ハノイ事務所

二月十日、ベトナム政府機関

PACOM(民間援助の受入機関)に招へいされて、国際NGOの緊急会合が開かれた。議題は米国バーミニア州議会での審議中の、旧南ベトナムの国旗をベトナムの正式国旗として認定する法案についてである。二時間程の会議で、米国団体が抗議声明文を、非米国団体はその抗議声明を支持するという文書を作成して署名した。ベトナム特有の政府対国際NGOの関係や、越米の複雑な外交関係が顕在化した一時であったが、同時にイラク問題に起因する欧・米・NGO間の微妙な対立も感じられた。

(西)

自然資源管理(ソノラ)

十二月下旬にトゥアンチャウ郡農業普及センターの協力を得て、草の根獣医ボランティアの技術トレーニングを実施した。この機会に二名の新人を迎え、計十三名の獣医ボランティアでコマ村二十二集落をカバーすることになった。続いて一月には三集落の代表二十一名とスタディーツアーを実施、二泊三日の行程でソノラ省の等高線農業モデルを見学した。(大松)

農村開発(ホアビン)

クイッチェン村で支援していた二つの水路と生活用水施設一カ所が完成。建設予定地まで運搬車が入れなかったり、天候不順などで予定が大幅に遅れることが予想されていたが、住民の頑張りにより、冬春作の田植え前には完成できた。一月には、クイッチェン村で、村づくり委員会と次年度活動計画を話し

合った。この一年は学ぶことが中心だったので、具体的な活動を話し合うことが初めての場となり、委員も積極的に意見を出した。合った。(鹿住)

南アフリカ

South Africa

農村開発

東ケープ州カララ地区で自然農業プロジェクトを始めて、二年がたった。「自然農業」は、無農薬・無化学肥料の有機農業であるが、それは「自然の持つ循環や、水や太陽エネルギーを最大限に活用すること」で降雨量の少ない厳しい気候の地域でも可能になる。活動を実施してきた八カ村でこれまでの達成点、課題、今後の重点活動などについて村人と話し合い、まとめていく。

子どもの教育支援

ハウテン州のフラックフォンテイン地区の自主学校「インクルレコ」の支援を行なっているが、政府の政策で近隣のスラムに住む人々を同地区に移住させることになり、人口が三千人から一万人に増えた。それに伴い政府が学校をつくり、インクルレコ小学校と統合される計画になり、政府との話し合いが進められている。(津山)

《緊急対応》

イラク

Iraq

医療支援

昨年からの調査を続けていたが、代表の熊岡路矢と吉野都看護師が一月九日から一月十四日までバグダッドに滞在した。「赤新月社」の母子保健病院は老朽化しているため、手術灯や、超音波検診装置が壊れている。経済制裁による資金難やスベアパーツがイラクでは見つからないためだ。JVCは一万ドルの予算で、病院の補修を行なうことを決定した。

絵画交流

二月一日、佐藤が日本の子どもが描いた絵を、イラクへ持っていき展示した。イラクの子どもたちにも絵を描いてもらい、日本に持ち帰り各地で報告会を行ない公開した。(佐藤)

パレスチナ

Palestine

子どもたちの栄養補給

一月二十六日、パートナーNGO、「ANEREA」のスタッフがナブルスの牛乳会社に着し、三万五千箱の牛乳を搬出した。二月四日にはガザに入り、二つの幼稚園、百四十五人に六ヵ月

分の牛乳を配布した。
マタニティ・サポートプロジェクト

本田 徹医師がパレスチナを訪問。医療の状況を調査するとともに、JVCと協力団体である「UPMRC」とのプロジェクトを視察した。パレスチナでは封鎖が厳しく人が移動できない中、巡回診療は非常に重要であることが改めて認識された。パレスチナの医師によると、家庭の経済状況を理由に中絶したいという相談が増えているという。封鎖の状況の中で、避妊薬なども手に入らない現状がある。(佐藤)

アフガニスタン

Afghanistan

ジャララバード事務所

長く懸案だったアフガニスタン政府へのNGO登録が完了した。米軍による援助調整を目的とする「暫定復興チーム(PRT)」に対して、アフガニスタンで活動するNGOの間で批判が高まっている。

JVCはNGOの連合組織「ACBAR」の協力を得て、人道援助と軍活動に関するシンポジウムを東京で開催した。

医療プロジェクト

巡回医療活動の対象地の一つホギヤニ郡メムラでの治安が悪化したため、巡回医療と伝統産婆トレーニングの計画は中断している。現在他の巡回地域であるゴシュタでの伝統産婆トレー

ニングの準備を進めている。
調査活動

巡回医療の次期の活動としてより地域に密着したものを計画している。JVC独自のクリニック設置と保健省のクリニック支援の二つの可能性を調査

平和と多文化共生をめざして

「Japan-Korea 平和ワークショップ2003」

金敬黙(調査研究)

二〇〇三年二月十五、十六日の二日間、東京・水道橋の在日本韓国YMCAで「Japan-Korea 平和ワークショップ2003」を開催した。このワークショップはJVCとネットワークを築いている「南北オリニオツケドンム」(韓国NGO)、「グッド・フレンズ」(韓国NGO)の協力を得て、JVC調査研究の一環として企画したものである。JVCがお世話になっているメディア、教育関係者、NGO関係者からも協力を得た。

ワークショップの主な目的は、「平和をつくるプロセスに参加すること。しかし、すべての人々が現場に出かけ、人道支援や国際協力を展開することは現実的に難しい。海外の現場に出かけられない人たちにもできることはないのだろうか。そこにあるのが、平和教育と多文化共生というキー

中。草の根獣医および女性の家禽飼育に関する活動の可能性も現在調査している。女性と子どもとの地雷被害をなくすためにOMARの地雷回避教育を支援する計画を準備中。(谷山)

ワード。今回は、その具体的なアクションの一つとして、日本とコリアの関係を事例に扱ってみた。多文化共生を考える上で南北コリアとの関係は、日本にとって重要なテーマの一つである。まずは、コリアと日本の関係、そして日本社会にくらす日コリアンたちとの関係を見直すことから、人々の多様性を理解し、差異を尊重したいと思った。

未来を変えるために、若い世代に何を伝えていけばいいのか。二日間のワークショップで明らかにした点は、人々の意見は多様であり、個々の意見を民族や国でまとめることは難しいということだ。しかし、教育現場では、国と民族を乗り越えるアプローチを探することは容易ではない。また社会的弱者といわれる外国人や少数者の声がメディアや教育現場では十分発せられていないということも確認できた。(キム・ギョムク)

新スタッフ紹介

パレスチナへ、カンボジアへ、南アフリカへ、新スタッフが赴任します。そして東京でもメンバーチェンジが。四月、JVCに新しい風が吹きます。

●小林やすえこばやしやすえ南アフリカ事務所／農村開発担当

卒業後、青年海外協力隊に応募したのですが、不合格。農業専門学校で学んで再挑戦し、協力隊員としてザンビアで村落開発普及をしてきました。その後、他のNGOのスタッフとしてインド・フィリピンでも数年活動。今度はJVCで、というわけです。



▲ザンビアでの協力隊時代

日本でも海外でも、地域や自然に密着した生活をしたい。その中で、周りの環境や人々にちよっぴり貢献できたらいいなあ。その想いの延長で今回、南アのカラ地区へ行くことに。今の関心事は、靴下はどちらを上にするか、つま先がゴム口か。もう一つ、親孝行のしかた。これまでずっと心配ばかりかけてきたから。

★私を動物に例えると蜂・スズメ・落ち着きがない。犬・甘いものがあるとしっぽを振る。

●原田 綾子（はらだ きょうこ）東京事務所／南アフリカ事業担当



二年間滞在中、カンボジアでは、ポルポト・地雷など暗いイメージに

反し、たくましく生きる人々に大いに励まされました。

これから担当する南アフリカもアパルトヘイトという負のイメージがありますが、それを乗り越え、新しい国づくりを進めている人々と共に活動できることを楽しみにしています。

音楽、食べ物、踊り、南アフリカの様々な魅力を探りたい。まずはワインから。

★私を動物に例えるとへび年・さそり座・毒がある？

●小林 和香子（わかし）パレスチナ事務所／代表



一昨年末まで、外資系広告代理店で、新商品の開発や新キャンペーンの企画をしてきました。

と、気がついたら十年以上の月日が。だんだん、昔から持っていた国際協力の仕事につきたいという気持ちが強くなり、一昨年末に退職。遅延しながら昨年四月から早稲田大学大学院で国

際関係学を学び始めました。修士論文のテーマはパレスチナの平和。

ある日、JVCに「パレスチナで働きたい」と突然メールをし、事務所に押し掛けられたのが、事の始まり。担当の佐藤さん、さぞかしびっくりされたことでしょう。普通はまず、ボランティアから始めたりするんですよ、といわれました。

★私を動物に例えるとカップス・湘南の浜で育った。海の側にいないと頭のお皿が干上がった感じになる。別にサーファークーじゃないんですけどね。

●高藤 香里（かうとう かおり）カンボジア事務所／インターン



東京事務所のインターンあがり？です。今度はカンボ

ジアでインターン。仕事は、調査・渉外・代表補佐、資料の翻訳、訪問者対応、日本への情報発信などでしょうか。

仕事だけでなく、カンボジアの人々の知恵や生き方を学びたいです。カンボジアの子どもたちとも交流したい。まずは、カンボジアの文化、歴史、そして、クメール語!! なのだ!

★私を動物に例えると ハムスターよく動くが、なまけていることも多い。ハムスターが頬に食べ物ため込むように、食べ物・知識・経験、なんでも欲張ってしまう。

●細野 純也（ほのの じゅんや）東京事務所／広報・IT&Eのレイ



アウト、システム管理）
アット、システムエンジニア

ニアとして七年。「ソフト屋」の血が流れています。国際協力とは全くの異業種ですが、「英単語頭文字略称」X、M、P、R、Aなどを濫発する点では似てるかも。アメリカに出張している時に九・一一が発生、米国の凄まじくしばらくしてフシギさを知りました。

社会にコミットする方法は会社勤務だけではないよな、と確認したくてここにいます。

最近、長年の目標であった「私服にきもの導入計画」を発動。父の「お対」をリサイズ中です。

★私を動物に例えると「動物占い」によると、ペガサスうなみに飛べません。キリンく見ればわかります。とにかく長い、細い。

募金をありがとうございます

JVCの活動は皆さまの募金で支えられています。

① JVC 募金

JVCの各国での活動に役立てられます。募金先をご指定いただくこともできます。

口座番号：00190-9-27495

加入者名：JVC 東京事務所

2月計 1,454,926 円

	2月
タイ	0円
カンボジア	43,534円
ラオス	186,000円
ベトナム	10,500円
エチオピア	0円
南アフリカ	83,666円
パレスチナ	48,850円
アフガニスタン	302,379円
北朝鮮	30,000円
無指定	517,397円
緊急 イラク	232,600円

② 犬養道子「みどり一本」募金

この募金はJVC活動地での植林プロジェクトに使われます。

口座番号：00100-8-212497

加入者名：犬養道子「みどり一本」

2月計 374,100 円 47名

③ JVC サポート募金

2月計 147,000 円 73名

お問い合わせ：03-3834-2388 (岩間 邦夫)

暮らしを彩る道具 62

LIFEWORk ITEMS

Afghanistan



アイロン

アイロンをあたためる



日本国際ボランティアセンター (Japan International Volunteer Center) は、1980年2月、タイのバンコクで誕生した市民による国際協力団体です。JVCの活動目的は、国際社会のなかで、社会的、精神的、物理的に困難な立場を強いられているアジアやアフリカ・中東の人々に協力すると同時に、地球環境を守る新しい生き方と人間関係を作り出そうということにあります。そのため私たちは、自らの意志でJVCに参加し、活動を継続してきました。JVCはボランティアという言葉で、「自発的意志をもって、責任ある行動をとる」という意味で団体名として使っています。

JVCでは会員を募集しています

会員は総会に出席し、JVCの方針などを決定するほか、情報・資料の入手、各種の活動・報告会・学習会等へ参加することができます。会員の方には年10回この会報をお届けします。

◎一般会員	10,000円
◎学生会員	5,000円
◎団体会員	30,000円

※それぞれに正会員と賛助会員があります。

ご入会は、次の口座へ郵便振替にて会費をご送金下さい。

口座番号：00150-3-48365

加入者名：JVC会員係

オリエンテーション (説明会) へどうぞ

JVCの活動内容をご紹介します。お気軽にご参加ください。(無料・予約不要)

第1月曜日 午後7:00 - 8:30

第2・第4土曜日 午後2:00 - 3:30

※会場はJVC東京事務所です。

会員の方のメールマガジンのお申し込み、住所変更などはこちら(会員担当)へ。

ikuko-n@jca.apc.org

会員数【3月10日現在】 合計 1,607人
正会員 648人 賛助会員 959人

E-mail

jvc@jca.apc.org

JVCのホームページ

<http://www1.jca.apc.org/jvc>

編集後記

JVCにボランティアとして通い始めて1年、スタッフとしては4年半、合わせて5年半関わらせていただきました。この間に結婚、出産と私個人の生活環境は大きく変わり(世界もより住みにくくなり)、今号をもってJVCを離れることになりました。みなさまありがとうございます。私の後任として、細野がこの「T&E」レイアウトを担当することになります。どうぞよろしくお願いいたします。(ふ)

2003年3月20日発行(毎月20日)

発行人 熊岡 路矢

編集人 大野 和興

編集スタッフ 荻野 洋子

レイアウト 福井 貴久子

発行所 日本国際ボランティアセンター (JVC)

東京事務所

〒110-8605 東京都台東区東上野1-20-6 丸幸ビル6F

電話 03(3834)2388 FAX 03(3835)0519

印刷所 ベスト・プリンティング

※ 本誌の記事・写真等の無断転載・複写を禁じます

※ 本誌は再生紙を使用しています

定価 500円